

「新時代の日本女性」という虚像

——海野十三と敗戦直後の女性探偵・蜂矢風子——

一・女性探偵と海野十三

日本における「SFの先駆者」⁽¹⁾として知られ、一九二〇年代から一九四〇年代にかけて空想科学小説や探偵小説を中心に数多くの作品を執筆した海野十三は、一九四六年五月の探偵小説雑誌『宝石』に丘十郎の筆名で「沈香事件」という短編を発表した。四段組で五頁しかないこの短い作品は、敗戦後の日本において女性探偵を主人公とした最初期の作品の一つと位置付けられる。

「蜂矢風子探偵簿・第一話」として発表された「沈香事件」は、その名の通り、蜂矢風子という探偵を主人公としており、その後「妻の艶書」(『宝石』一九四六年)、「幽霊妻」(『物語』一九四七年)⁽²⁾と続く蜂矢風子を描く一連の作品の第一作目と位置付けられる。二十歳という若さで自身の名を冠した探偵事務所を構える蜂矢風子は、「臍脂の手ざり」のよささうな羅紗のワンピースに「やや赤いパー

ベント 勇亮ヘンリー

マネントの髪」という、敗戦直後から流行した「アメリカン・スタイル」⁽³⁾を彷彿させる出で立ちで描かれ、作品冒頭に次のように述べられる。

わづかに二十歳の若冠で、こんな職業を一本立てやり通さうといふ彼女の決意には、悲壮な感じがしないでもないが、当人の方はそれほどにも思つてゐないらしく、かなり大きな夢を持ち、元気にやりつづけてゐるところは遠に新時代の日本女性だと拍手を送りたくもなる。

(「沈香事件」)

「新〇〇」というチームは敗戦直後から新聞や雑誌などのメディアで散見され、村岡花子編『新日本の女性に贈る』(一九四六年)のように、女性の労働や教育の拡充などと頻繁に結びつけられる傾向にあった。「沈香事件」冒頭において「新時代の日本女性」という用語がみられる背景にもそうした影響があると考えられ、前述の「アメリカン・スタイル」の描写と共に、蜂矢風子が同時代の女性を取り巻く言説を意識した人物であることを示している。また、

ニュース映画『日本のニュース』の分析を通して戦中及び占領期の女性の公的メディア表象について論じた堀ひかりが、「働く女性」が、単に集団的な労働力ではなく個人として扱われ、場合によっては発言の場を与えられたのは、敗戦直後（1946—1947）の特徴⁽⁴⁾と指摘したように、一九四六年は女性議員や女性警官の登場など、「働く女性」の存在が女性解放の機運の高まりを象徴していた時期にも該当する。無論、同年一月の「公娼制度廃止に関する件」の通達で「公娼制度は廃止しても私娼として存続を認める」⁽⁵⁾とされたことをはじめ、多くの問題が山積していた事実もあり、一九四六年と女性解放を安直に結びつけることはよくないが、様々なメディアを通して「働く女性」への関心が高まっていた時期であったことには違いなく、そうした時期に男性作家の海野によって女性探偵として働く蜂矢風子が描かれていることは、同時代の男性から「働く女性」に向けられた視線の一端を考えるうえでも目を向けるべきであろう。そこで本稿では、「沈香事件」、「妻の艶書」、「幽霊妻」の三作品における蜂矢風子の人物像を同時代言説との接続を通して分析し、女性の社会進出がどのように捉えられ、大衆文化の一つである探偵小説の形にどのようにして落とし込まれたかを考察することとで、敗戦直後の「働く女性」をめぐる言説形成の一端について検討する。

また、本稿では敗戦直後の同時代性という視点に加え、戦中からの連続性という視点でも蜂矢風子の人物像について考察する。海野

は蜂矢風子以前に二人の女性探偵を描いている。一人は、探偵小説作家の太田下宇陀児、木々高太郎との連作として雑誌『大洋』に一九三九年から一九四〇年にかけて連載された「風間光枝探偵日記」の主人公風間光枝で、もう一人が一九四一年から『講談雑誌』に連載された「科学捕物帳」の主人公風間三千子である⁽⁶⁾。日本の探偵小説史における女性探偵の系譜について論じた横井司は、風間三千子を主人公としていた作品が「探偵役を風間光枝に改めたうえで」単行本に収録されていることなどを指摘し、「名前の印象が似ている」両者が「海野の中ではほとんど区別されていなかったようだ」と述べている⁽⁷⁾。従来の研究において、蜂矢風子はこの二人の女性探偵の添え物のような扱いを受ける傾向にあった。例えば、小松左京と紀田順一郎が監修した『海野十三全集』（一九八八—一九九三年）では、風間光枝が主人公の「什器破壊業事件」（『大洋』一九三九年）と風間光枝が主人公の「鬼仏洞事件」（『講談雑誌』一九四一年）が収録されているのに対し、蜂矢風子を主人公とする作品は収録されていない。また、横井は、「最初から正統的な私立探偵として描かれている」風間光枝について、女性を「探偵役としてよりも犯罪者として形象することが多い」ことや、女性探偵が描かれたとしても「浮かれている」「隼」（『新青年』一九二五年）以降の久山秀子作品に登場した隼お秀のような「犯罪者というありよう」を通じたものが多いという日本の探偵小説における女性探偵表象に新たな側面をもたらした作品として評価するが、その一方で蜂矢風子についてはそ

の延長線上の一人物としか捉えていない。そこで本稿では、従来の研究を踏まえたうえで蜂矢風子を中心とした分析を行うことで、戦中と敗戦直後の表象を対比的に考察し、海野十三の女性探偵表象の系譜についても新たな視点から検討する。

二、敗戦直後の女性探偵

ここで、蜂矢風子を主人公とする三作品のあらすじについて簡単に確認する。第一作目「沈香事件」では、目が不自由な寺本明子に沈香を焚き染めた夫のハンカチの搜索を依頼される。夫の不貞調査にまで発展した依頼に苦悩する蜂矢風子だったが、彼女の探偵の師である南洞雷夢の働きもあり、無事に事なきを得た。第二作目「妻の艶書」では、妻の絹代の不貞を疑う木名瀬士郎が、相手とされる吉野恒吉の自宅から証拠となり得る「艶書」を手にするよう依頼する。蜂矢風子は一通しか「艶書」を手でできなかったが、絹代の計報を告げる嘘の手紙を受け取った吉野恒吉が木名瀬士郎の自宅に押し掛けたことで事態が急変し、三人で協力することで、実際に吉野恒吉と手紙のやり取りをしていたのが絹代ではなく女中であることを突き止めた。一九五〇年の夏を舞台とする第三作目「幽霊妻」では、他の男と歩く亡き妻の姿を銀座で見かけたと主張する保狩卷太郎から、その真相の究明を依頼される。助手の春川と共に調査に乗り出した蜂矢風子は、生理学の関博士という人物が保狩卷太郎の妻

の葬儀の際に強盗に押し入り、妻の遺体を盗んだことを突き止め、関博士が「高压電気による神経電撃術」によって保狩卷太郎の妻を生き返らせたということを告白させた。以上、各話のあらすじを踏まえたうえで、主人公蜂矢風子の人物像の分析へと移る。

まずは、蜂矢風子の人物像の外枠にある就業形態についてである。本稿冒頭でも触れたように、蜂矢風子は「蜂矢風子探偵事務所」という私立探偵事務所を構えている。「私立探偵事務所の看板を掲げてから、もうかれこれ一年になる」とあることから、開業時蜂矢風子は十九歳から二十歳ほどであったことが窺える。「沈香事件」と「妻の艶書」では「例の如く建物難のため自宅の一部を利用してゐる」事務所であるとされ、蜂矢風子の母親が取次を行っている様子が描かれていたが、「幽霊妻」では「警報ブザー」や玄関の様子を映す「テレビジョン」などの設備を持つ事務所へと変貌を遂げており、事務所としての成功が垣間見える仕組みとなっている。

この蜂矢風子の就業形態には、堀ひかりが敗戦直後の公的メディアの特徴として挙げる「『働く女性』が、単に集団的な労働力ではなく個人として扱われ」たという傾向に通ずるものがある。蜂矢風子以前に海野十三が描いた二人の女性探偵には、必ず何かしらの所属があった。風間光枝は丸の内にほど近い「星野私立探偵所」に勤める探偵とされており、続く風間三千子は、政府の「特務機関」に属する「特務機関員」である。そうした中で蜂矢風子のみが独立した探偵として描かれていることは、「働く女性」を「個人」として

捉えた同時代のメディアと結びつけられよう。また、この就業形態をめぐっては、女性探偵と男性探偵の扱いが同列に近いものになりつつあることも指摘できる。「麻雀殺人事件」(『新青年』一九三一年)

にて海野が描き出し、風間光枝や風間三千子が主人公の作品にも度々登場する帆村壮六は「東京丸の内に事務所を持つている有名な私立探偵」⁽¹⁾とされており、自身の事務所を持つ、ないしは個人で活動する男性探偵と、所属先を持つ雇われた女性探偵という二つの立場の違いが明確化されていた。無論、風間光枝と風間三千子の間にも若干の相違はある。風間光枝は、海野の友人に「女性の信用調査員がいた」⁽²⁾ことや、シーメンス事件の調査にかかわった岩井三郎の探偵事務所に実際に所属していた女性探偵天野光子をモデルとしている可能性など、⁽³⁾実在した女性とのつながりが指摘されている。そうした同時代社会との直接的なつながりに加え、勤務地も丸の内周辺とされていることから、同時代の職業婦人を連想させる人物となっている。一方の風間三千子は、「鬼仏洞事件」の冒頭に「特務機関から命ぜられた大陸に於けるこの最後の仕事、一つに女流探偵の風間三千子の名誉がかけられていた」⁽⁴⁾とあり、横井も「純然たるスパイ小説」⁽⁵⁾のような内容が見受けられると指摘するように、軍国主義的な色合いが強い。そのため、所属先と一口に言っても、風間三千子の場合は政府の「特務機関」となっており、風間光枝の「星野私立探偵所」とはややテイストが異なるといえよう。とはいえ、両者ともに自身の名を冠した事務所を持っているわけではない。敗

戦後の蜂矢風子が唯一自身の名を冠した探偵事務所を持ち、就業形態上は帆村壮六と同列の存在になっていることは特筆すべき事項であろう。

また、就業形態に関連する点としては、蜂矢風子が「蜂矢風子探偵事務所」を開く以前の経歴も目を見張るものとなっている。「沈香事件」の終盤において、蜂矢風子の探偵の師である南洞雷夢について述べられている一節があるが、その中に「かつて先生の私立探偵事務所に風子は三ヶ年間在籍してゐた」とある。前述の通り、蜂矢風子は事務所開設時に十九歳前後であるため、遅くとも十六歳から、少なくとも四年以上は探偵業に携わっていると考えられる。他の事務所から若くして独立し、海野が描く女性探偵の中では唯一自身の事務所を構える蜂矢風子は、その就業に関する人物像のみ踏まえれば、前途洋々の優秀な探偵のようである。しかしながら、作中での実際の探偵としての描かれ方は、大きくかけ離れたものであった。

「沈香事件」の導入部は次のように書かれている。

さて次に御紹介する「沈香事件」は、蜂矢風子探偵すべり出し第一の事件であるが、もちろん生首が飛んだり血の海に漂ったりするやうな大事件ではない。が、何か彼女らしい風格が窺はれるので、これを第一話を選ぶこととする。(『沈香事件』)

この「もちろん生首が飛んだり血の海に漂ったりするやうな大事件ではない」という一節に着目したい。犯罪に善し悪しはないが、探

偵小説の核となる事件が「大事件ではない」と断言されることには疑問が生じる。例えば、海野が「沈香事件」以前に同じ『宝石』に発表した「密林荘事件」(『宝石』一九四六年)では、「突如其つた怪死事件」⁽¹⁶⁾との紹介があり、作品序盤から事件の謎に興味を引きつける技巧が凝らされている。また、極端な例だが、同じ『宝石』でみると、横溝正史の「本陣殺人事件」(『宝石』一九四六年)第一話では、冒頭から「恐ろしい事件」や「妖琴殺人事件」といった言葉が並んでいる。⁽¹⁷⁾「大事件ではない」と断言する「沈香事件」は、まさにそうした作品と正反対のことをしているのである。しかし、そうした「大事件ではない」はずの事件が、捜査が始まるや否や大きな変化を見せる。

風子は書斎に籠つて、ひとりとなつた。どういふ訳か、涙がぼろぼろ出て来て、留めやうがなかつた。あの哀れな俄か盲目の秋子のために泣きたくなつたのか、それともこんなむづかしい事件を押しつけられたわが身の当惑の故に涙が出て来たのか、そこはどうも判然しなかつた。
(「沈香事件」)

ここでは、「大事件ではない」はずの事件が「こんなむづかしい事件」となっていることがわかる。前者が語り手による評価、後者が蜂矢風子による評価ではあるが、「沈香事件」冒頭には「悲観しませわ。一向魅力に富んだ大事件にぶつからないんですものね」と、この事件も含めた過去を振り返る蜂矢風子の発言があるため、彼女自身もこの事件を魅力的な「大事件」とみなしていないことが指摘

できる。しかし、彼女はその事件に「当惑」し、涙を流す。この描写によって、些細なはずの事件にも苦心する探偵という蜂矢風子の人物像が確立され始める。

この傾向は続く「妻の艶書」ではより明確となる。再び依頼内容を「むづかしい仕事」としながらも、「そんなことで尻ごみしてゐたら探偵商売は一つとしてつとまらない」と捜査を始めた蜂矢風子であったが、すぐに行き詰ると、次のような場面が挿入される。

風子は絶望の極ハンカチーフを顔にあてるとわつとその場に泣き伏した。彼女は、自分が力もないのに女性探偵になつたことを大いに恥ぢ、そして悔いた。(…)そしていよいよ畳に喰ひつくやうにして泣いた。
(「妻の艶書」)

「沈香事件」と比べ啼泣の激しさが増しており、「わが身の当惑」とされていた涙の要因も「力もないのに女性探偵になつたこと」とより明確化されている。無論、苦心する探偵は、様々な探偵小説にみられる描写の一つである。捜査の難航は事件の難解さを強調し、その謎が「徐々に解かれて行く径路の面白さ」⁽¹⁸⁾をより一層強めるといえよう。しかし、蜂矢風子の苦心は作品の結末部まで続き、事件の解決によって彼女が「力もないのに女性探偵になつたこと」がより一層強調されるのである。

本節冒頭でも触れた通り、「沈香事件」と「妻の艶書」はどちらも唐突な解決を迎える。例えば、「沈香事件」では次の通りである。
「あのう、夫のハンカチーフが戻つて参りました。(…)こん

なことならこちらさまをお騒がせしなくてもよかつたのでございます。もうすっかり安心いたしました。」

と、盲目秋子は報告してから、風子の断るのを聞かず、押し付けるやうにして謝金の一封を差出した。

「もうそれでお心はおすみになつたんですか」

風子はあまりふしぎだから、さう訊いてみた。なるほどハンカチーフは戻つたかもしれないが、彼女の夫と川部ユカリの問題は一向解決してゐないではないか。

「はい。もうもうこれで安心いたしましたでございます」

〔沈香事件〕

前述の通り、事件は南洞雷夢によって解決されていたことが後程明かされるわけだが、依頼された探偵の蜂矢風子が蚊帳の外となつてゐることがこの一節から窺える。「妻の艶書」でも吉野恒吉の突然の訪問により事態が急変し、依頼者の木名瀬士郎を含めた三人が「自分の知識を惜しみなくさらけ出すこと」で事件が解決している。

ここで着目したいのが、どちらの事件も蜂矢風子自身が一人で解決していないということである。主人公ないしは作品の中心に位置づけられた探偵が自力で事件を解決する場合が描かれていない「沈香事件」と「妻の艶書」は同時代の探偵小説と比べても変則的な作品といえるだろう。捜査に行き詰り、さらには自力で事件を解決できない蜂矢風子は、その就業形態から想定される探偵像とは大きく離れた存在とされたのである。ではなぜ、そのような表象がなされた

のか。その背後にあるのは、作品内に描かれる男性の存在である。

三、女性探偵と男性

「沈香事件」での南洞雷夢、「妻の艶書」の木名瀬士郎と吉野恒吉、そして「幽霊妻」における助手の春川と、事件の捜査を行う蜂矢風子の周辺には常に男性が描かれる。それぞれが果たす役割は異なるが、いずれも探偵としての蜂矢風子の人物像の形成に寄与していることは確かである。

前述の通り、「沈香事件」と「妻の艶書」はどちらも蜂矢風子自身というよりも、周辺の人物の力があつて事件が解決しているが、その周辺の人物はいずれも男性である。当初は蜂矢風子の「助手」として登場しながらも事件を解決した南洞雷夢、蜂矢風子と共に事件の真相を探りだした木名瀬士郎と吉野恒吉、「妻の艶書」ではさらに「吉野家へ良く出入りしてゐる十五六歳の少年」も事件の捜査に協力しているが、いずれも男性なのである。横井は、風間光枝や風間三千子が「最後で帆村壮六に助けられる格好になることが多い」とし、「海野十三のテキストでは、女性探偵は常に男性探偵の後塵を拝するか、協力者として現れる」と指摘したが、間違ひなく蜂矢風子もそのうちの一人である。むしろ、その傾向が戦中に発表された二名よりも顕著だといえよう。

確かに横井が指摘するように、風間光枝と風間三千子が携わる事

件は多くの場合帆村壮六が解決するが、二人の活躍もその解決に大きく寄与している。例えば、風間光枝は「盗聴犬」(『大洋』一九三九年)において、人事不省になりながらも帆村壮六を差し置いて外国人スパイによる工場の爆破事件を未然に防ぐ活躍をし、「もう彼女は、チンピラ探偵でもなく、要監督助手格探偵でもなく、りつばな一流の女探偵となった」⁽²⁰⁾と称されており、風間三千子は「鬼仏洞事件」で殺人の決定的瞬間をカメラに収め、「特務機関長」や帆村壮六が「最大級の言葉でもって、(…)功績を褒めてくれた」⁽²¹⁾様子が描かれている。つまり、単に「男性探偵の後塵を拝するか、協力者として現れる」のではなく、両者ともに活躍の場が描かれているのである。一方、これまで確認してきたように、「沈香事件」と「妻の艶書」における蜂矢風子は捜査への着手から解決まで、彼女自身の活躍の場が無いに等しく、その活動の全てにおいて男性が深く関与しているのである。横井はこの二作品について「恋愛がらみの事件を扱うことで、戦前の風間光枝・風間三千子とは違い、より地に足の着いたリアルな造形になっている」⁽²²⁾と評したが、つまりは、扱う事件の規模が明確に小さくなっているのである。無論、その背景特に風間三千子の場合には時局的な要因も十分に考えられる。戦時下では婦人雑誌の表紙に女性戦闘パイロットが描かれるなど、総力戦体制を示す戦意高揚の題材に実在しない女性像が用いられたことがあったが、帆村壮六と共に国家の危機に立ち向かう勇敢な「特務機関員」として描かれた風間三千子もそうした存在の一つであった

といえよう。とはいえ、明確に事件の規模が縮小した蜂矢風子にのみ活躍の場が無く、事件が男性の手に帰結していることは興味深い。蜂矢風子が「働く女性」をはじめとした同時代の女性の社会進出をめぐる言説を意識した人物と考えられるにもかかわらず、なぜこうした逆行ともいえる表象の変化がみられるのか。そのことを考える上で再度目を向けるべきなのが、蜂矢風子が探偵業に携わり始めた時期と作品が発表された時期である。

前節でも触れた通り、一九四六年時点で二十歳の蜂矢風子の探偵としての経歴は、南洞雷夢の下で働いていた時期を合わせると四年以上となり、単純に考えると、彼女は一九四二年前後から探偵業に携わっていることとなる。一九四二年といえば、戦時体制下における女性の勤労働員がより厳しさを増し、女性が戦地へ駆り出された男性に代わり、「男性的な職域に進出する」⁽²⁴⁾動きが盛んにみられた時期であった。しかし、当然ながら一九四六年では状況が大きく変化していた。

一九四五年二月一六日の「厚生大臣閣議要望事項…復員および失業者の推定に関する注」には、「戦争終結に伴い(…)1,324万ノ復員者ヲ生ジ之ニ対シテハ極力前職復帰ヲ図ルノ外現在就職セル女子等ヲ家庭ニ復帰セシメテ代替就職セシムル」⁽²⁵⁾と記されている。戦時下において男性の「代替」として様々な職域に進出した女性が一転、「復員者」をはじめとする男性のためにそれらの職域から追い出されたのである。いわゆる「婦人よ、家庭へかえれ」⁽²⁶⁾として知

られる動きだが、蜂矢風子の探偵業もこの動きと似ているのではない。例えば、横溝正史が金田一耕助にとつての戦後初となる事件を描いた「獄門島」(『宝石』一九四七―一九四八年)では、一九三七年を舞台とする「本陣殺人事件」以降の金田一耕助の生活が次のように書かれている。

金田一耕助が岡山県の農村の、旧本陣一家で起つたあの不思議な殺人事件の謎を解いたのは昭和十二年のことであり、当時から二十五六の青年だつた。その後かれは何をしてゐたか。

――何もしなかつたのである。日本のほかの青年と同じやうに、かれもまた今度の戦争にかりたてられ、人生でいちばん大事な期間を、空白で過して来たのである。⁽²⁷⁾

探偵としての金田一耕助は戦時下において不在となり、敗戦後の復員によつて探偵に復帰したのである。蜂矢風子は、そうした男性探偵の不在を補う「代替」探偵とでもいふべき存在だつたのではないだろうか。

この「代替」探偵という視点から蜂矢風子を捉えなおすと、「沈香事件」と「妻の艶書」に登場する男性が持つ意味合いがより鮮明になる。前述の通り、この二作品に描かれた事件は男性によつて、または男性との協力によつて解決されている。端的にいえば、女性の蜂矢風子が引受けたはずの仕事が男性の手に帰結しているのである。この構造を踏まえると、これまで確認してきたような蜂矢風子の探偵としての力量を疑問視させる一連の描写にも、女性である蜂

矢風子一人では苦心する事件に協力、または解決する男性の存在を強調する働きがあることがわかる。「沈香事件」における南洞雷夢に關してはもはやデウス・エクス・マキナの域に近いが、そうした露骨ともいえる描写を通して蜂矢風子の探偵としての役割が男性の手に帰結する様子が描き出されているのである。ではなぜ、そうした表象と並行して第二節で確認した就業形態や蜂矢風子を「新時代の日本女性」と称する一節が作品内に存在するのか。

四 「新時代の日本女性」

「沈香事件」が『宝石』に掲載されるひと月前の一九四六年四月に玉城肇が発表した「女性解放についての錯覚」(『日本評論』一九四六年)という評論の中で次のような一節がある。

女性の解放を主張すると、男性達は、直ぐ感情論を持ち出すので困る。勿論、理論としての女性の解放には賛成するといふけれども「男のやうな女が出来るのはいやだ」と云ふ。⁽²⁸⁾

ここに書かれた「女性の解放」に対する男性の意見は、女性をめぐる議論が盛んに交わされた同時代において珍しいものではなかった。帯刀貞代は『働く女性のために』(一九四九年)の中で男女共学をめぐる教師の討議について記したが、そこでも「女性が男性と同じ能力をもち、同じ権利をもてばもつほど、女性としてのつつしみ、こまやかな心づかい、ゆたかな愛情などを失わせないとする空

気が圧倒的」であり、「従来の封建的な女性観から脱していきなくてはならない」と「新しい女らしさ」が議題に上がっても、「しよせん、封建的な女性観の埒の外にはふみだしていいない」段階にとどまっていたことが指摘されている。⁽²⁹⁾ 例えば、「女の子が野球をやりたいがり、男の子からグローブやバットをとりあげたりすることを百人が百人、それはやりすぎだ!」とおもつてしまう⁽³⁰⁾といったことなどが挙げられている。前述の玉城による評論も、独立した女性の重要性を主張しながらも、最終的にそれが「家庭婦人として最も有能にして、恵智にあふれた女性」⁽³¹⁾へと繋がることと述べており、「女性の解放」へ関心を示していた人々ですら「封建的な女性観」から脱却することができなかったことが窺える。

同様の傾向が蜂矢風子をめぐる表象にもあったのではないだろうか。横井は敗戦後しばらくまで探偵小説の「ジャンル自体が、ほとんど男性の創作主体によって担われていた」とし、その結果女性探偵が描かれることも「とても稀少」であったと指摘する。⁽³²⁾ そうしたホモソーシャルな空間において海野が描いた女性探偵は、風間光枝や風間三千子のように、男性に雇われ、「男性探偵の後塵を拝するか、協力者として現れる」存在であった。蜂矢風子は自身の事務所を構える独立した探偵となることで、従来の女性探偵表象の枠組みから脱却したように思えたが、前述の通り、その実態は戦時下の二人の女性探偵よりも「男性探偵の後塵を拝するか、協力者として現れる」存在として描かれていた。男性的な職域に進出し、男性と同列の就

業形態を持つ蜂矢風子が、結局男性の手に帰結するという構造は、前述の帯刀の女の子と野球の例に通ずるところがあるといえよう。蜂矢風子の表象は、「新時代の日本女性」といった建前を持ちながらも、実際には極めて「封建的な女性観」に基づいている。この混在した表象は、玉城が指摘した「理論としての女性の解放」には理解を示しながらも、「感情論」の面ではそれを否定した同時代の男性を中心に散見された言説と一致する。つまり、蜂矢風子の矛盾した人物像の背景には、前節で確認した女性の社会進出と「婦人よ、家庭へかえれ」という職をめぐる政治的・社会的な動きと、「女性の解放」を意識しながらも「封建的な女性観」から脱却できない言説という、大きな社会的矛盾が存在していたのである。

五、「幽霊妻」という終着点

第二節でも触れたが、「幽霊妻」に描かれる蜂矢風子の探偵事務所は最新の設備を備えた建物であった。一九五〇年の夏を舞台としているため、「沈香事件」と「妻の艶書」からおよそ四年が経っているわけだが、蜂矢風子は、どのようにして探偵事務所を発展させたのだろうか。

その大きな要因を示す一節が「幽霊妻」の中に描かれている。

ちよつとここで断っておく必要があると思うが、願鬚の変装探偵と風子助手との関係は、客を前にしての場合と、彼ら二人

だけの場合とは主従関係が逆転するのであった。本当は蜂矢風子女史が、この探偵事務所の所長さんであり、頤髭の変装探偵は、かの青年であり、そして女史の寝室において明かにせられたように、この青年春川は女史の助手に過ぎない。しかし一度客を前にすると、春川青年は名探偵蜂矢なりと名乗り、女史は小さくなって助手の風子さんになっちゃうのであった。どういふ必要があつてそんなことをするのかよく分からないが、とにかくそれは女流探偵蜂矢女史の趣味なのであろう。

〔幽霊妻〕

横井はこの点について、「現在の視点からすれば、女性が探偵事務所の所長であると依頼人が知ると、信用されないからというような説明が入るところであろう」と述べ、その「ノンシランさ」を指摘する。⁽³⁹⁾この横井の指摘は、引用部の一節を的確に要約したものであるが、「沈香事件」からの連続性の中でみると、蜂矢風子を取り巻く環境の変化がより明確になる。

確かに、「沈香事件」の冒頭において蜂矢風子は、「一向魅力に富んだ大事件にぶつからない」理由に「女性の探偵だといふと、ひとが莫迦になさる」こと、「年端もゆかないちんぴら」であることを挙げている。しかし、「沈香事件」と「妻の艶書」のどちらの依頼人も蜂矢風子への依頼として事務所を訪れている。確かに寺本秋子は年齢に若干の懸念を示したが、木名瀬士郎は「今までの事件依頼人の誰よりも自分を信頼してゐてくれる」と、蜂矢風子に大きな信

頼を寄せている様子が描かれている。だが、依頼の場面の細部に目を向けると、「幽霊妻」とのある違いに気付く。

「幽霊妻」での依頼の場面は次のように描かれる。

「ああ、貴下が有名な蜂矢探偵どのですか。お目にかかつて嬉しいです。先生、自分は発狂しそうです。先生、自分を助けて下さい。ああ、恐ろしいことだ。恐ろしい……」

(…)

「一体どうなされたのですか。事情を詳しくお話下さい。僕たちは全力をあげて、あなたのお力になりましょうから……」

「ありがとうございます」 (幽霊妻)

「有名な蜂矢探偵どの」や「お目にかかつて嬉しい」など、依頼人の保狩巻太郎がいかに春川が変装した蜂矢探偵に信頼を寄せているかが伝わる場面だが、そうした表現は「沈香事件」、「妻の艶書」にはみられない。代わりに、「遠慮なくお願いいたしてよろしいですか」、「むづかしい事かもしれませんが(…)何とかやつていただきますませう」など、不安や遠慮が窺われる表現がみられ、「幽霊妻」のような探偵への絶対的な信頼がみられないのである。その違いは、探偵側が蜂矢風子か、頤髭の変装を施した助手の春川か、という点である。作品内では、返答に詰まる春川に指示を出す場面や、自ら重要な情報を聞き出し、捜査を進めるなど、「沈香事件」と「妻の艶書」と比べ、蜂矢風子の探偵としての力量は上がっており、春川のそれを凌駕していることは明らかである。しかし、それでも彼女

は「すこし脳の足りないオフィス・ガールのような面つきをし、白絹のワンピースを裾短かに着こなして、男の蜂矢探偵のうしろ」に立つことを選択した。つまり、蜂矢風子は探偵役を自身から男性に、それも若さを誤魔化すために頤髭の変装をした男性に変えることで、「沈香事件」で懸念していた若い女性探偵という事実を隠し、探偵事務所の信頼を高め、発展させたのである。「蜂矢風子探偵事務所」とされていた名称も「蜂矢探偵事務所」へと変えられていることも、蜂矢風子という探偵が表舞台から身を引いたことを示しているといえよう。横井が「前二作とは打って変わったSFミステリ」⁽³⁴⁾と指摘した通り、「幽霊妻」は「恋愛がらみの事件」とは大きく異なり、吹雪である北方に飛行機で降り立ち、「心臓麻痺で死んだ人間の心臓を再び動き出させる」力を持つ博士と対峙する蜂矢風子の姿を描き出す。こうした事件の性質の差は、掲載誌や発表年の違いのみならず、探偵事務所の形態の変化も影響しているといえないだろうか。皮肉なことだが、蜂矢風子は彼女自身ではなく、男性の蜂矢探偵を事務所の顔とすることで、「沈香事件」冒頭で切望した「魅力に富んだ大事件」にぶつかることができたのである。

こうして女性の社会進出への関心の高まりと女性労働者の排除という相反する動きの中に登場した探偵蜂矢風子は、家父長的な社会に迎合する形で幕を下ろした。第四節で触れた帯刀の『働く女性のために』が一九四九年の末に出版されたものであることを踏まえると、一九五〇年の夏という近い未来を舞台とした「幽霊妻」が描く

蜂矢風子は、一向に変化しない「女性の解放」をめぐる言説を予言していたようでもある。現代社会においても、女性活躍推進法など、いまだ政策レベルでの議論が続き、「封建的な女性観」からの脱却が遅々として進んでいないといえる。極めて表面的な「女性の解放」を体現した蜂矢風子の存在は、海野の女性探偵表象の枠組みのみならず、再び虚像としての「新時代の日本女性」を生み出さないためにも目を向けられるべきであろう。

注

(1) 中島河太郎編『日本推理小説辞典』（東京堂出版、一九八五年九月）三頁。

(2) 「幽霊妻」の表題と初出については、初出誌未見につき、横井司「解題」（木々高太郎・海野十三・大下宇陀児『風間光枝探偵日記（論創ミステリ叢書31）』論創社、二〇〇七年一〇月）掲載の書誌情報に基づいている。また、横井司は「幽霊妻」について初出時の題が「幽霊妻事件」であると指摘しているが（三六五頁）、初出誌未見につき、本稿では「風間光枝探偵日記（論創ミステリ叢書31）」にある「幽霊妻」の題を用いる。

(3) 千村典生「増補 戦後ファッションストーリー 1945-2000」（平凡社、二〇〇一年一月）一五頁。「アメリカン・スタイル」とは、敗戦直後から一九四七年ごろまで見られたスタイルのことで、「ワンピース、スーツ、ジャケットとスカートの組み合わせ」で「いかり肩のショートスカート」スタイルを作り上げることが一般的であった（二八頁）。また、同時期には「コールド・パーマ」と呼ばれるパーマネントの髪形も流行していたという（一五頁）。

(4) 堀ひかり「戦中・占領期公的メディアにおける女性像の変遷——『日本

ニュース」が描く「働く女性」と皇后を中心に」(『日本ジェンダー研究』第5号、日本ジェンダー学会、二〇〇九年九月) 三四頁。

- (5) 藤野豊「戦後日本の公娼制度廃止における警察の認識——内務省警保局保安係「公娼制度廃止関係起案綴」の分析」(『人文社会科学研究所年報』No.12、敬和学園大学、二〇一四年五月) 四一頁。

- (6) 前掲、横井司「解題」三六二―三六六頁を参照。

- (7) 前掲、横井司「解題」三六二―三六三頁。

- (8) 前掲、横井司「解題」三五四頁。

- (9) 海野十三「什器破壊業事件」(『大洋』第一巻第四号、文藝春秋社、一九三九年九月) 六〇頁。丸の内との位置関係については、海野十三「盗聴犬」(『大洋』第一巻第七号、文藝春秋社、一九三九年十二月) 八七頁を参照。

- (10) 海野十三「鬼仏洞事件」(小松左京・紀田順一郎監修『海野十三全集』第7巻 地球要塞」三一書房、一九九〇年四月) 四〇七頁。

- (11) 同右、四〇七頁。

- (12) 紀田順一郎「解題」第7巻「地球要塞」(小松左京・紀田順一郎監修『海野十三全集』第7巻 地球要塞」三一書房、一九九〇年四月) 四六一頁。

- (13) 末國善己「編者解説」(野村胡堂『野村胡堂探偵小説全集』作品社、二〇〇七年四月) 四五八頁。

- (14) 前掲、海野十三「鬼仏洞事件」三九八頁。

- (15) 前掲、横井司「解題」三六四頁。

- (16) 丘丘十郎「密林荘事件」(『宝石』第一巻第一号、岩谷書店、一九四六年四月) 一五頁。『占領前期「宝石」復刻版』第一巻(三人社、二〇二〇年二月) 所収。

- (17) 横溝正史「本陣殺人事件(第一回)」(『宝石』第一巻第一号、岩谷書店、一九四六年四月) 二頁。『占領前期「宝石」復刻版』第一巻(前掲) 所収。

- (18) 江戸川乱歩「幻影城」(岩谷書店、一九五一年五月) 一頁。

- (19) 横井司「都市のなかの女性探偵たち」(菅聡子編『国文学解釈と鑑賞』別冊 女性作家《現在》』至文堂、二〇〇四年三月) 一七五頁。

- (20) 前掲、海野十三「盗聴犬」九三頁。

- (21) 前掲、海野十三「鬼仏洞事件」四〇六頁。

- (22) 前掲、横井司「解題」三六四頁。

- (23) 若桑みどり「戦争がつくる女性像」(筑摩書房、一九九五年九月) 一四頁。

- (24) 上野千鶴子「家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平」(岩波書店、一九九〇年一〇月) 一八五頁。

- (25) 大河内一男編『資料・戦後二十年史4 労働』(日本評論社、一九六六年一〇月) 一頁。

- (26) 大羽綾子『男女雇用機会均等法前史——戦後婦人労働史ノート』(未來社、一九八八年九月) 二三頁。

- (27) 横溝正史「獄門島(第一回)」(『宝石』第二巻第一号、岩谷書店、一九四七年一月) 一二頁。『占領前期「宝石」復刻版』第2巻(三人社、二〇二〇年十二月) 所収。

- (28) 玉城肇「女性解放についての錯覚」(『日本評論』第二巻四月号、日本評論社、一九四六年四月) 三五頁。

- (29) 帯刀貞代「働く女性のために」(雄文社、一九四九年二月) 一一六―一一七頁。岩見照代監修『時代が求めた「女性像」——大正・戦中・戦後にみる「女の一生」』第一四巻(ゆまに書房、二〇一二年二月) 所収。

- (30) 同右、一一九頁。

- (31) 前掲、玉城肇「女性解放についての錯覚」三五頁。

- (32) 前掲、横井司「都市のなかの女性探偵たち」一七二頁。

- (33) 前掲、横井司「解題」三六五―三六六頁。

- (34) 前掲、横井司「解題」三六四―三六五頁。

【付記】「沈香事件」と「妻の艶書」の本文の引用は、すべて『占領前期「宝石」復刻版』第一巻(三人社、二〇二〇年十二月) 所収「『宝石』第一巻第二号」内の丘丘十郎「沈香事件」及び「『宝石』第一巻第四号」内の丘

丘十郎「妻の艶書」による。また、「幽霊妻」の本文の引用は、木々高太郎・海野十三・大下宇陀児『風間光枝探偵日記（論創ミステリ叢書31）』所収、海野十三「幽霊妻」による。本文及び資料の引用の際、ルビは省略し、旧漢字は新漢字に改めた。引用中の中略はすべて引用者による。